

家持用字法の研究

——A部（巻十六以前の家持作歌）の検討——

古 屋 彰

1

「家持用字法の研究序説」⁽¹⁾の冒頭において述べたように、大伴家持の用字法を研究するということは、

一、確実な家持用字圖を求める。

二、そして得た家持用字圖の歌を材料に家持用字法を明確にする。

の二点を試行錯誤的に追究することに他ならない。

まず、研究のふりだしとして、種々の点で純粹に家持用字法を伝えているであろうと目されるB₁部⁽²⁾とC₁部⁽³⁾とを設定した。B₁部は天平十九年の二月から四月にかけての大伴池主への贈歌であり、C₁部は天平勝宝二年の三月から四月にかけての自作のメモである。仮名を中心に両者の用字法を比較検討した結果、三年間の年月のへだたりと贈歌とメモという差異

を考慮に入れるならば、両者を家持用字圖と見なしてほぼ間違いないと推定された。次に、この推定をより確実にするためと更に他に家持用字圖を求める目的とをもって、A部（巻十六以前の家持作歌）をとりあげることにした。A部は、天平五年頃から同十六年までの凡そ十二年にわたる作歌をあわせもち、しかも巻三・四・六・八・十六の諸巻にわたって多少とも編纂整理時の手が加わっているかも知れない。従ってその扱い方がむずかしいのであるが、前稿においては、凡その見当をつける意味でA部を一括して扱い、その音仮名を中心にB₁・C₁との比較検討を試みたのであった。そして、その限りでは、二三の疑問点は残りながらAを家持用字圖と見なすことにそれほど支障はないようであった。

本稿では、Aを一括して扱うことの妥当性を吟味しながら、Aの家持用字圖としての確実性を更に検討してみたいと

思う（以下、卷三・四・六・八・十六中の家持作歌をそれぞれ $A_3 \cdot A_4 \cdot A_6 \cdot A_8 \cdot A_{16}$ と称する）。

2

Aにおける巻別の歌数は

A_{16}	A_8	A_6	A_4	A_3	／
	二			三	長歌
	四八・五		六四	一八	短歌
二	五〇・五	九	六四	二一	計

の如くであって、巻別の用字法を検討して行く場合、常にこの歌数の偏りを念頭に置かなければならない。

まず、Aにおける巻別の短歌（長歌の反歌も含めて）一首あたりの平均字数をみると、

計	A_{16}	A_8	A_6	A_4	A_3	／
一四一・五	二	四八・五	九	六四	一八	歌数
二八二七	四五	九七九	一八〇	一二五八	三六五	総字数
二〇・〇	二二・五	二〇・二	二〇・〇	一九・七	二〇・三	平均字数

の如くであって、 A_{16} の二二、五字がわずかに二首の平均であることをもって論外に置くとすれば、巻による差異はそれほど大きくはない。

次に、Aにおける巻別の音仮名・訓仮名の総用例数及び両者の比率をみると、

A_3	音 仮 名		訓 仮 名	
	用例数	比率	用例数	比率
二二四	九三・四		一五	六・六

となり、 A_1 の仮名表記に対する助字使用率が A_2 のそれに比して二〇、〇% A_3 のそれに比して二二、五%高く、音仮名に対する訓仮名の使用率と同様の傾向を示している。

同じ正訓字主体表記でありながら A と C_1 との間に訓仮名及び助字の使用においてかなりの開きが存在することは前稿で既に述べたのであるが、 C_1 に対する A の特徴的なものが、 A_3 よりは A_2 に A_3 よりは更に A_1 に色濃く現われていることが、右の調査で明らかとなった。前稿で立てた仮説に従って、正訓字主体表記の流れの中にそれぞれを位置づけることは可能であり、もし A 全体を家持用字圏と見なしてよいならば、家持のより若い時代の歌が、 A_3 よりは A_2 に A_3 よりは更に A_1 に多く含まれていることになるのである。

3

扱て、別表Ⅰ（稿末）によって A における巻別の仮名を概観する。

まず、三巻以上にわたって使用されている仮名は

安（ア）、伊（イ）、可・番（カ）、我（ガ）、寸（キ甲）、久（ク）、家（ケ甲）、許（コ乙）、左・狹（サ）、之・思・志・師（シ）、曾（ソ乙）、多（タ）、都（ツ）、手（テ）、登・等・跡・常（ト乙）、杼（ド乙）、奈（ナ）、尔（ニ）、乃・能（ノ乙）、波（ハ）、麻（マ）、美（ミ甲）、武・牟

（ム）、毛・聞・母（モ）、也・八（ヤ）、良（ラ）、里（リ）、流・留（ル）、礼（レ）、乎（ヲ）

の四十四字母にものほり、大まかに云って、 A が一人の手録になると見ることの可能性を思わせる。さらに、右の四十四字母の中で B_1 にも C_1 にも見られない仮名は

寸（キ甲）、師（シ）、手（テ）、跡・常（ト乙）、聞（モ）、八（ヤ）、留（ル）

の八字母であって、しかも

聞（モ）、留（ル）

を除く他はすべて訓仮名（及びそれに準ずるもの）である。従って、これらが $B_1 \cdot C_1$ を溯る家持用字圏として一応説明のつくことは、すでに前稿において述べたところである。

一方、一巻のみに孤立的にみられる稀な仮名（特に、その音節に該当する音仮名が三巻以上にわたって用いられている条件の下で一巻のみに孤立的にみられる音仮名、及びその音節に該当する訓仮名が三巻以上にわたって用いられている条件の下で一巻のみに孤立的にみられる訓仮名）は

A_3 谿（ケ甲）、所（ソ乙）、物（モ）

A_4 苦・九（ク）、飼・毛（ケ乙）、四・時（シ）、追（ツ）、

十・二（ト乙）、飯（ヒ甲）、理（リ）、為（ヲ）

A_5 藻（モ）

A_6 佐・三（サ）、仁（ニ）、播（ハ）、哭（モ）、夜・二（ヤ）

A ₄	A ₃		
24 3	9 3	者波	ハ
18	7 3 1	者婆波	バ
20 13 1	8 14 2	之匏乃能	ノ
13	6	之我	ガ
30 1	9	而手	テ

の如くであって、用例数の少いA₆とA₁₆を考慮外に置くとして、A₄の音仮名に対する訓仮名の使用率がA₈のそれに比して一、二% A₃のそれに比して一四、九%高いことは注目すべきであらう。

更に、助詞ハ・バ・ノ・ガ・テ・(シ)テの表記をみると、

計	A ₁₆	A ₈	A ₆	A ₄
八一七	一八	三二四	二七	二四四
八六・八	九〇・〇	八九・七	八七・一	七八・五
一二四	二	三六	四	六七
一三・二	一〇・〇	一〇・三	一二・九	二一・五

計	A ₁₆	A ₈	A ₆	A ₄	A ₃		
二五八	一	八七	二六	一〇五	三九	用例数	助字表記
七三・三	一〇〇・〇	六五・四	七八・八	八五・四	六二・九	比率	
九四	〇	四六	七	一八	二三	用例数	仮名表記
二六・七	〇・〇	三四・六	二一・二	一四・六	三七・一	比率	

の如くであって、巻別の助字表記と仮名表記の用例数及びその比率は、

計	A ₁₆	A ₈	A ₆
56 7		17 1	6
43 4 1	1	14 1	3
60 1 68 8		25 1 35 5	7 6
32 1		8 1	5
67 4		23 2	5 1

の二十字母ある（用例数2以上のものは仮名の下に算用数字で示す）。その中で、

曾許念尔胸已所痛（3四六六）

言卷毛齋忌志伎可物（3四七五）

出都追来良久（4七五五）

事二思安利家理（4七二七）

は変字法によるのであろうし、

於保尔曾見谿流（3四七六）

念有四九四（4七五四）

得飼飯而雖宿（4七六七）

今時者四（4七三二）

千遍立十方（4七三二）

将響十方不有（4七八〇）

得飼飯而雖宿（4七六七）

狹尾壯腹鳴哭（8一六〇三）

は字面の面白さのために用いるところとなったのであろう。更に、

苦（ク）、佐（サ）、仁（ニ）、播（ハ）、夜（ヤ）

の仮名は、B₁或はC₁にみられ、特に

佐（サ）、夜（ヤ）

はB₁において家持の常用するところとなるのであるから、右の稀な字母の存在によって、巻別の異なる筆録者を想定するには及ばないと思われる。ただ、量質ともに注意すべきは

A₄にみられる四（シ）であろう。

右に挙げた稀な仮名には該当しないけれども、別表Iを見ていて注意を引かれるのは

A₃ 吉2（キ甲）

A₄ 二19（ニ）、見4（ミ甲）、六2（ム）、八7（ヤ）

の仮名である（但し、二はA₂に四例、八はA₃・A₄に各一例ある）。この中で、

見（ミ甲）、六（ム）、八（ヤ）

は訓仮名であって正訓字や他の訓仮名に接して用いられており、

吉（キ甲）

はB₁において家持の常用するところとなるのであるから一応省くとすれば、量質ともに注意すべきはA₄にみられる二（ニ）であろう。かくして、結局のところ、A全体を一人（家持）の筆録になると想定するのに検討を要するのは、A₄に集中して見られる

四（シ） 七例

二（ニ） 一九例

の存在である。A₄におけるこれらの存在を如何に考えればよいのか、以下検討を加えてみたいと思う。

A₄における数字使用に注目すべきことは、前稿で触れたのであるが、右のような手順をふんで抽出された仮名は、四

(シ)と二(ニ)である。

(四)

氣緒_四爾_四而_四(六八二)

物不思_四手_四(七二二)

今時者_四(七三二)

由戀_四家武_四(七四五)

念有_四九四_四(七五四)

念有_四九四_四(七五四)

聲_四爾_四出_四名_四者_四(七九〇)

(二)

妹_二毛有鴨_四(六九二)

情内_二(七〇五)

心中_二(七一八)

三礼_二見津礼_四(七一九)

石木_二毛_四(七二二)

事_二思安利家理_四(七二七)

玉_二毛我_四(七三四)

手_二所纏牟_四(七三四)

手_二毛不所觸者_四(七四二)

頸_二將繫母_四(七四三)

夢_二爾相見_四(七四四)

朝夕_二(七四五)

奈何為_二(七四八)

夢_二二谷_四(七四九)

面影_二三湯_四(七五四)

妹_二不相_四(七六八)

練乃村戸_二(七七三)

打乍_二波_四(七八四)

輕引時_二(七八九)

右は、A₄における四(シ)と二(ニ)の全用例である。この用字に関しては、

① 家持の一時期の用字傾向がたまたま巻四に偏って現われた。

② 相聞往来の歌ということに数字使用との因果関係がある。

③ 家持以外の、資料蒐集者或は編纂整理者といったような人の手が加わった。

等のいろいろの場合が考えられよう。

A₄の六十四首(短歌のみで長歌はない)を四等分して、四(シ)と二(ニ)の分布をみると、

合 計			
四と二	その他		
4	6	11	5
11	10	11	10

の如くであって、IIに偏ってはいえるもののほは全体に散在しており、家持の一時期の用字傾向がたまたま偏って現われたとみえることは無理であろう。右の表をやや作爲的につくりかえてみると、

合 計		シ		ニ	
四と二	その他	四思之志時師		尔二丹荷	
I 六二一〇七二〇 16首	1 1	1 1		9 4	
II 七二二〇七四七 16首	3 1 1 1	1 1 1 1		6 8 1	
III 七四八〇七七一 16首	2 1	1 1		8 4 1	
IV 七七三〇七九〇 16首	1 1 1	1 1 1		8 3	

合 計			
四と二	その他		
5	14	7	
19	13	10	

の如く偏りの位置がかなりはっきりしてくるのであるが、これをもつてしても、家持の一時期の用字傾向の反映とみるのはやはり無理である。ただ、巻末近くの二十四首における四（シ）と二（ニ）の使用率が低いことだけは、一応注意しておくべきであろう。

相聞往來の歌と数字使用との因果関係の有無については、例えば巻四（相聞）と巻六（雑歌）とを比較してみると（家持作家を除く）、

合 計		シ		ニ	
四と二	その他	四思之志時師		尔二丹荷	
I 六二一〇七二二 17首	2 1	1 1		9 5	
II 七二七〇七五五 23首	4 1 1 1 1	1 1 1 1 1		7 10 1 1	
III 七六四〇七九〇 24首	1 1 1 1 1	1 1 1 1 1		15 4	

		シ		チ		ト乙		フ乙		ナ		ニ		ハ	
卷四	卷六	之四思志時指僧師石僧		知千		登等跡常十与奥迹共		膳杆等跡常十		奈名七葉魚冥		尔二仁丹荷似資		波破八盤羽齒葉	
36 21 15 3 1 1	49 10 12 1	18 1 1		1 1		8 2 27 24 6 7 1 3		4 2 3 1 1 2 1		19 17 1 1 1		148 65 1 6 2 1 1		23 4 2 8 1 1	
1 6 8										1 3				10 1	

ミ甲		ム		ヤ		ヨ乙	
美弥三見水御	牟武謀六	也夜八屋	与余餘世四呼				
4 2 9 11 1	13 10 1 4	9 1 9	10	1 1 2		1 1	
8 3 18 13	3 4 5	2 1 5 1					

の如く、卷四相聞に量的に多く数字使用（但し、この場合一字一音の仮名のみを対象とした）が見られることは確かであるが、 $A_3 \cdot A_6 \cdot A_8 \cdot A_{16}$ に対する A_4 の特色をこの線だけから説明しつくすことは無理であろう。卷六における数字使用の处在を検討すると、

		シ		チ		ト乙		フ乙		ナ		ニ		ハ	
全体	卷頭部	四千十七二三六八		合計											
10 1 4 1 2 18 18 5 5	6 2 1 15 15 2 4														

の如く、卷頭部（九〇七・九五三、但し九四八・九四九を除く）の金村・千年・赤人作歌にかなり偏在しているのであって、ある歌人なり筆録者なりの用字傾向を示すものと思われる。

卷四における数字使用は、特に技巧的に使用したと見られる例は稀であって、むしろ画数の少い簡易な文字として女性の多く用いるところとなり、贈答する際に男性も相手の用字にひかれて使用するといったことも、たしかにありそうに思われる。しかしながら、雑歌と相聞をあわせもつ卷八における四（シ）と二（ニ）が

〔四〕

見九四与四門（一四二二） 春雑、尾張連
見九四与四門（一四二二） “ ”
今且寄四（一四三六） “ 大伴宿祢村上
鳴日四曾多寸（一四七三） 夏雑、大宰帥大伴卿
心四有良思（一四七六） “ 小治田朝臣廣耳
棹四香能（一五四七） 秋雑、藤原朝臣八束

(17)

見左右二(一四二〇) 春雜、駿河采女

一夜宿二来(一四二四) " 山部宿祢赤人

沫雪二相而(一四三六) " 大伴宿祢村上

然為我二(一四四一) " 大伴宿祢家持

相貫左右二(一四六五) 夏雜、藤原夫人

實尔成二家利(一四八九) " 大伴家持

不欲云二似(一五〇三) 夏相、紀朝臣豐河

多夫手二毛(一五二二) 秋雜、山上臣憶良

芽二貫置有(一五四七) " 藤原朝臣八束

霜毛置奴我二(一五五六) " 忌部首黑麻呂

色付二家利(一五六八) " 大伴家持

枝毛十尾二(一五九五) " 大伴宿祢像見

月立左右二(一六二〇) 秋相、大伴坂上郎女

見左右二(一六四七) 冬雜、忌部首黑麻呂

花開二家里(一六四九) " 大伴宿祢家持

の如く、著しく雑歌のしかも男性作歌に偏って現われたりすることを思えば、相聞往來の歌と数字使用との因果關係を積極的に主張することは、やはり無理である。

扱て、右のように「家持の一時期の用字傾向がたまたま卷四に偏って現われた」とみることに無理があり、「相聞往來の歌ということに数字使用との因果關係がある」とすることにも又無理があるとすれば、次に、家持以外の資料蒐集者或

は編纂整理者の手を想定してみなければならぬ。

5

卷四に収められた家持相聞の歌六十四首の贈答の相手及び歌数は

坂上大嬢 三一首

娘子 一三首

紀女郎 八首

藤原朝臣久須麻呂 五首

交遊 三首

笠女郎 二首

童女 一首

(不明) 一首

であって、これらの歌が蒐集される場所は、作者である家持の手元か、或は歌を贈られた相手方かのいずれかがまず考えられる。

一方、家持へ贈答をなした人々及び歌数は

笠女郎 二四首

坂上大嬢 一〇首

山口女王 五首

中臣女郎 五首

紀女郎 三首

余明軍 二首

河内百枝娘子 二首

粟田女娘子

二首

藤原朝臣久須麻呂

二首

藤原郎女

一首

大神女郎

一首

童女

一首

であつて、これらの歌の蒐集される場所は、それぞれの作者の手元か、或は贈られた相手の家持のところかのいずれかであらう。

右の家持を中心とする贈答歌百二十二首は

① 五七九一六一八

② 六七五一七九二

の両群中に存在し、両群総計百五十八首の七七、二%を占めている。従つて、これらの資料が巻四の編纂整理者の手にわたるいきさつを想像すれば、これらの資料の大部分の蒐集者として大伴家持が大きく浮かび上がってくるのである。事実、例えば

笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首（五八七一六一〇）

は、その左注に

右二首相別後更米贈

とあつて数度に送られた歌が一括されていることから家持側の蒐集が予想され、更に左注にみる「米贈」なる表現は、あくまで家持側のものでなければならぬ。これに類するものとして、巻四中他に

〔大伴宿禰家持贈童女歌一首（七〇五）

童女米報歌一首（七〇六）

〕又家持贈藤原朝臣久須麻呂歌二首（七八九・七九〇）

〔藤原朝臣久須麻呂米報歌二首（七九一・七九二）

があるのみで、いずれも家持への「米報」の歌である。家持の歌口誌と目される巻十七以下の

平群氏女郎贈越中守大伴宿禰家持歌十二首（一七三九三一・三九四二）

右件十二首歌者時々客便使來贈 非在一度所送也

姑大伴氏坂上郎女米贈越中守大伴宿禰家持歌二首（一八四〇

八〇・四〇八一）

從京師贈來歌一首（一九四一八四）

右四月五日從留女之女郎所送也

等の例を思い合わせる時、資料蒐集者として家持を考えることはほぼ妥当であらうと思われる。又、右の両群中に存在する

大伴坂上郎女從跡見庄賜留宅女子大嬢歌一首并短歌（四七二

三・七二四）

右歌報賜大嬢進歌也

の「賜」或は「報賜」の書きぶりは、家持歌口誌中の

從京師米贈歌一首并短歌（一九四二二〇・四二二二）

右二首大伴氏坂上郎女賜女子大嬢也

の「賜」と思いくらべると、やはり家持の記録と思われてな

らない。

かくて、A₁の資料提供者が家持自身の可能性が大きいとすれば、次に巻四の編纂整理者を考えてみなければならぬ。

従来、巻四の編纂整理者として大伴家持を想定する説が多いのであるが、A₁の作者もその資料蒐集者も家持であり更にそれを編纂整理した人もまた家持自身であるとすると、A₁における四(シ)や二(ニ)の使用者は家持以外に考えにくくなる。A₁における用字に家持以外の人の手を予想してみるとすれば、巻四の編纂整理者或はそれを手伝った人として、家持以外の人物の可能性を探ってみなければならぬ。

6

〔四〕

君二四不在者(四八六)

哭左倍鳴四(四九八)

四時二生有(五〇九)

吾四乏毛(五三三)

副而曾米四(五六六)

○哭耳四泣裳(六一四)

君之聞四手(六一九)

長四云者(六一九)

家二四手(六三三)

岡本天皇

柿本朝臣人麻呂

丹比真人笠麻呂

大伴宿奈麻呂宿禰

大伴宿禰百代

山口女王

大伴坂上郎女

〃

娘子

和備曾四二結類(六四四) 紀女郎

哭耳四所泣(六四五)

四惠也吾背子(六五九)

夢二四所見(六六二)

月四有者(六六七)

○娘子部四(六七五)

○無四呼(七〇六)

路多豆多頭四(七〇九)

山二四居者(七二一)

本名四戀者(七二三)

○中与杼尔四手(七七六)

○待常二師有四(七九二)

君二四不在者(四八六)

百重二物(四九九)

涙二曾(五〇七)

朝名寸二(五〇九)

暮名寸二(五〇九)

四時二生有(五〇九)

不告来二計謀(五〇九)

三相二搓流(五一六)

飽左右二(五三三)

大伴坂上郎女

市原王

大伴坂上郎女

中臣女郎

童女

豊前國娘子大宅女

大伴坂上郎女

〃

紀女郎

藤原朝臣久須麻呂

〃

岡本天皇

柿本朝臣人麻呂

駿河媛女

丹比真人笠麻呂

〃

〃

〃

阿倍女郎

大伴宿奈麻呂宿禰

〔二〕

安蘇、二破（五四三）

直相左右二（五五〇）

友無二思手（五五五）

黑髮二（五六三）

入江二求食（五七五）

友無二指天（五七五）

○吾戀二（五九六）

○和備居時二（六一八）

田付乎白二（六一九）

如是念二（六二〇）

消者消香二（六二四）

白髮生二有（六二七）

鹿糞藻闕二毛（六二八）

目二破見而（六三二）

手二破不所取（六三二）

家二四手（六三四）

久流部寸二（六四二）

和備曾四二結類（六四四）

置二家里（六五一）

夢二四所見（六六二）

吾家之上二（六六三）

零十方雨二（六六四）

笠朝臣金村

作者未詳

大宰帥大伴卿

大伴坂上郎女

大納言大伴卿

〃

笠女郎

大神女郎

大伴坂上郎女

〃

天皇

娘子

佐伯宿祢赤麻呂

湯原王

〃

娘子

湯原王

紀女郎

大伴坂上郎女

市原王

安都宿祢年足

大伴宿祢像見

○吾妹子二（六六五）

光二米益（六七〇）

○數二毛不有（六七二）

梅二破有跡五十戸（六七四）大伴坂上郎女

○咲澤二生流（六七五）

○君二波將相（六七六）

吾二可緣跡（六八四）

人二所知名（六八八）

千人無二（六九〇）

過跡者無二（六九三）

力車二（六九四）

敷布二（六九八）

月二日二異二（六九八）

月二日二異二（六九八）

月二日二異二（六九八）

一瀬二波（六九九）

○何日二箇（七〇一）

○又外二將見（七〇二）

○我衣手二（七〇八）

月之光二（七一〇）

君二遇難寸（七一二）

山二四居者（七二一）

安倍朝臣蟲麻呂

湯原王

安倍朝臣蟲麻呂

大伴坂上郎女

中臣女郎

〃

大伴坂上郎女

〃

大伴宿祢三依

大伴宿祢千室

廣河女王

大伴宿祢像見

〃

〃

〃

〃

河内百枝娘子

〃

粟田女娘子

安都原娘子

丹波大女娘子

大伴坂上郎女

念二思（七二三）

二寶鳥乃（七二五）

鴨二有益雄（七二六）

○手二母將卷乎（七二九）

○手二卷雜石（七二九）

○戀二不勝而（七三八）

高二 (七五八)

○如是為而後二（七六二）

○沫緒二撻而（七六三）

○在手後二毛（七六三）

○待常二師有四（七九二）

藤原朝臣久須麻呂

紀女郎

大伴田村家之大嬢

同（大伴坂上）大嬢

大伴坂上大嬢

"

"

"

"

右は、巻四(但し家持作歌を除く)における四(シ)と二(ニ)の全用例である(作者名は題詞・左注にあるがままたに記す。また、用例の上の○印は家持への贈歌、◎印は坂上郎女への贈歌であることを示す)。

今、これを四群にわけて四(シ)と二(三)の分布をみると、

37	26	3	20	四と二	合計	④ 六七五〇七九二	③ 六一九〇六七四	② 五七九〇六一八	① 四八四〇五七八	之四思志時指師僧石	シ
44	50	33	108	その他							
28	30	1	1	1	1	28	30	1	1	28	30
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

の如く、③群及び④群において高い使用率を示している。②群は前述の家持中心の資料⑦群に含まれ、④群は家持中心の資料⑩群に含まれる。③群は、坂上郎女の歌で始まり坂上郎女の歌で終る坂上郎女蒐集集の資料とみられる一群であり、その中に、坂上郎女作歌十六首と坂上郎女への贈答歌六首とが含まれている。

ここに、卷四の編纂整理者として、家持に次いで坂上郎女の可能性が考えられてよいはずである。

7

卷三雜歌には、家持作歌は一首も含まれていない。「登筑波岳丹比真人國人作歌一首并題歌（三八二・三八三）」が田邊福麻呂關係歌であって、若宮年魚麻呂の手に出る一群と共に後に増補されたと推定されることは別に述べたことがあるが、原卷三雜歌は

大伴坂上郎女祭神歌一首并題歌（三七九・三八〇）

右歌者 以天平五年冬十一月供祭大伴氏神之時 聊作此歌 故曰祭神歌

で終るものであらうと思われる。卷三挽歌末尾の「悲傷死妻高橋朝臣作歌一首并題歌（四八一・四八三）」も福麻呂關係歌であって後の増補と推定されること同じく述べたところであるが、或は「十一年己卯夏六月大伴宿祢家持悲傷亡妾作歌」の一群（四六二・四七四）及び「十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿祢家持作歌」の一群（四七五・四八〇）も後の増補であるかも知れない。とすれば、原卷三挽歌は七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首并題歌（四六〇・四六一）

右新羅國尼名曰理願也 遠感王德歸化聖朝 於時寄住大納言大將軍大伴卿家既遇數紀焉 惟以天平七年乙亥忽沈

運病既趣泉界 於是大家石川命婦依餌藥事往有間溫泉而不會此喪 但郎女獨留葬送屍柩既訖 仍作此歌贈入溫泉で終ることになって、原卷三雜歌の体裁に似通い、雜歌と同じく家持作歌は含まれていなかったことになる。

卷三挽歌の部に家持作歌が増補され、卷三雜歌の部に家持作歌は増補されなかった。卷六雜歌の巻尾にある福麻呂歌集所出の二十一首が後の増補と推定されること同じく述べたところであるが、これに先んずる家持中心の資料（一〇二九・一〇四三）も同じく後の増補とすれば、原卷六雜歌は十一年己卯 天皇遊獵高岡野之時小獸泄走都里之中 於是適值勇士生而見獲即以此獸獻上御在所副歌一首（一〇二八）

右一首大伴坂上郎女作之 但未遇奏而小獸死斃 因此獸歌停之

で終っていたことになる。これ又、左注をもつ坂上郎女作歌であって、卷三雜歌と挽歌に似ているのである。ただ、家持作歌の中に数首の夾雜物があること、福麻呂歌集歌が二十一首（長歌六首を含む）もの大群であること、同じ増補と見られる福麻呂關係歌「石上乙麻呂卿配土左國之時歌三首并題歌（二〇一九・二〇二三）」が配流の時期を勘案して（但し記憶違いがあるか）然るべき位置にさしはさんでいること等から、同じ増補とは云っても、卷六の場合は編纂へのかかわりの姿勢があるようにも見られるのである。

ところで、卷三譬喻歌は短歌二十五首からなる小群である。その中に家持作歌が離れて三首見られるが、作者及びその排列は恰も卷四を縮小して見せた感がある。卷四相聞の資料の中から選ばれて分離したものであろうか。卷の並びから云っても、卷三・四は本来一体のものと思われる。

扱て、卷三（譬喻歌を除く）・六に原卷三・六とも云うべきものの存在が予想され、それらは天平十年前後の坂上郎女歌で終るものであったと推定される。これら卷三・六の場合と同様に、卷四にも原卷四とも云うべきものが存在したであろうと思われるが、はっきりそれと指摘することは困難であり、家持中心の資料の増補のされ方も卷六に比して更に複雑である。しかしながら、原卷三・六の成立に坂上郎女が深いかわりを持つらしいとするならば、本来卷三と一体たるべき卷四の成立にもまた坂上郎女が深くかわったろうことは想像に難くない。

卷三・六の増補が誰の手によってなされたかは別として、その際歌の表記などが殆ど書き改められていないであろうことは、田邊麻呂関係の歌に個性的な用字法が指摘できることによっても確かであろう。これに對して、 A_1 の四（シ）や二（ニ）の用字を家持以外に求めなければならぬとすれば、卷四の増補或は編纂に際してのみは別人の手が加わったことになる。そして、その別人とは、種々見てきたように、坂上郎女である可能性が大きいのである。

8

ここで再び用字法にたちかえて、卷四における坂上郎女作歌（以下坂4と称する）を検討してみよう。

A全体を確実な家持用字圏と見なすことの妥当性を吟味するために

① 短歌一首あたりの平均字数

② 音假名と訓假名の比率

③ 助詞ハ・バ・ノ・ガ・テ・（シ）テの助字表記と假名表記の比率

④ 使用假名字母及び用例数

の四つの視点からAの巻別の状態を調査してみて、それぞれの点で A_1 に特徴が認められたのであったが、まずそれを整理しておく

① A_1 の短歌一首あたりの平均字数は一九、七字であって、 A_2 のそれに比して〇、五字 A_3 に比して〇、六字低い。

② A_1 の音假名に対する訓假名の使用率は二一、五％であって、 A_2 のそれに比して一一、二％ A_3 に比して一四、九％上回っている。

③ A_1 の助詞ハ・バ・ノ・ガ・テ・（シ）テにおける假名表記に對する助字の使用率は八五、四％であって、 A_2 のそれに比して二〇、〇％ A_3 に比して二二、五％上回っている。

④ Aにあって偏在し、或る程度の用例数を持ち、 B_1 にも C_1

にも見られない特異な仮名として四(シ)と二(ニ)が指摘され、四(シ)の七例のすべてと二(ニ)の二十三例中の十九例までがA₁に偏在する。

の如くであった。①は僅少差ではあるが②と③はかなりきわだった特徴を示しており、正訓字主体表記の流れに関して立てた私の仮説に従えば、A₁は他に比して古く位置づけられることになる。これらに対して、④はかなり決定的な意味をもつものであり、四(シ)と二(ニ)を「家持の一時期の用字傾向の現われ」と見ることも「相聞往来の歌との因果関係」において把握することも無理があつて、結局は家持以外の編纂整理者の手を予想してみなければならなかったのである。但て、坂4における短歌(長歌の反歌も含めて)の一首あたりの平均字数をみると、

	歌数	総字数	平均字数
坂 4	三六	七〇六	一九・六

の如くであつて、A₁に比して更に〇、一字低いことになる。又、坂4における音仮名・訓仮名の用例数とその比率をみると、

坂 4	音 仮 名		訓 仮 名	
	用例数	比率	用例数	比率
一六六	七一・二		六七	二八・八

の如くであつて、音仮名に対する訓仮名の使用率は、A₁に比して更に七、五%上回っている。

次に、助詞ハ・バ・ノ・ガ・テ・(シ)テの表記をみると、

坂 4	ハ		バ		ノ		ガ		テ	
	者羽	者婆	之乃	之我	而手					
16 2 1 5 1	11 1	24 16 1	6 1	10 2						

の如くであつて、助字表記と仮名表記の用例数及びその比率は、

坂 4	助 字 表 記		仮 名 表 記	
	用例数	比率	用例数	比率
六七	六九・一		三〇	三〇・九

となり、仮名表記に対する助字使用率は、A₁に比して逆に一

六、三%下回っている。

最後に、坂4における使用仮名字母及び用例数を見ると、 A_1 にかなり近く、例えば、 A の中 A_1 にのみ見られる仮名(但し、 $A_3 \cdot A_6 \cdot A_8 \cdot A_{16}$ にその音節の該当例の皆無のものは除く)で坂4にも見られるものがある。

鹿(カ)、苦(ク)、四(シ)、十(ト乙)、荷(ニ)、羽(ハ)、六(ム)、湯(ユ)

の八字母もあり、更に当面問題としていた四(シ)と二(ニ)が

坂 4		
	シ	ニ
6 3 1 8 1	四之思師僧	尔二丹荷
17 12 2 1		

の如く多用されているのである(具体的な用例は前に掲出)。

かくて、助詞ハ・バ・ノ・ガ・テ・(シ)テにおける仮名表記に対する助字の使用率に關してのみは問題が残るが、用字法の上から見ても、坂上郎女は A_1 に手を加えた編纂整理者としてふさわしい人物と云ってよい。

しかしながら、このようなことは一つの可能性として云い得ても、決定的に論証しつくすことはむずかしい。ただ、可能性としてこのようなことが考えられるとすれば、 A_1 は、家

持用字園からは一応省いておくのが穏当であろう。

注

- (1) 金沢大学法文学部論集文学篇15所載。
- (2) 卷十七の家持・池主間贈答歌中の家持作歌
3965
3966
3969
3970
3971
3972
3976
3977
3991
3992
4000
4001
4002
4006
4007
- の十五首を指す。
- (3) 卷十九の巻頭部(四一三九〜四一九八)から
4164
4165
4169
4170
4173
4174
4177
4178
4179
4184
4189
4190
4191
4197
4198
- の十五首を除いた家持作歌を指す。
- (4) A_9 の短歌の首数が四八・五とあるのは、尼との合作(二六三五)の下句を〇・五と数えたためである。
- (5) 音仮名か訓仮名かの帰属を定め難い(香)と(師)は省いた。
- (6) 「家持用字法の研究―訓仮名の消長と助詞表記の推移―」(金沢大学法文学部論集文学篇16所載)。
- (7) 娘子とあるのは、前後四度にわたって家持が歌を贈っているものであって、同一人物かどうかははっきりしない。
- (8) 藤原郎女の歌は、家持が坂上大娘へ贈った歌に和したものである。
- (9) 「田邊福麻呂之歌集と五つの歌群―その用字を中心として―」(万葉45号所載)。

別表 I

1	1	1	2	師	
2		1	3	須 醉	ス
1				受	ズ
1			2	世 勢	セ
1			1	蘇	ソ 甲
1	9	2	8	5 1	曾 所 ソ 乙
2	1 1		1	1	多 田 タ
3		2	4	都 追 津	ツ
2		1			
2	1	2		手	テ
1				而	デ
		1		戸	ト 甲
2	5 1 5 3	1	3 1 7 4 2 1	2 1 4 1 1 1	登 等 跡 常 十 与 ト 乙
	1		3 3 1	1 1	杼 跡 利 ド 乙
2	13 1 1		2 1	5	奈 名 菜 ナ
3	61 4 1 1	5	31 19 1 1	27	尔 二 仁 丹 荷 ニ
2			2		奴 ヌ
1		1			祿 ネ
1			1		努 ノ 甲
35 5 1	6	13 1	14 2	乃 能 匱	ノ 乙

A ₁₆	A ₈	A ₆	A ₄	A ₂	
2		3	1		安 ア
2		1	2		伊 イ
3	1		2		宇 得 ウ
1			1		於 オ
8 1 8	1 1	7 5 1	8 2 2		可 加 香 鹿 カ
5		1	2		我 ガ
1			1 2 1		伎 吉 寸 キ 甲
2		3			伎 ギ 甲
		1			木 ギ 乙
3		7 1 1	1		久 苦 九 ク
2					具 グ
6 1	1	3	3 1 1		家 鷄 緒 ケ 甲
1		1 1 1	1		氣 食 飼 毛 ケ 乙
1					姑 コ 甲
6 1		2	3 1		許 己 コ 乙
			1		其 ゴ 乙
2 3 2		3 1	1 1		左 佐 狹 サ
11 4 1	3	2 3 7 2 1	14 8 1		之 思 四 志 時 シ

1	2 2 1	2	7	1	也夜八	ヤ
1		1			由湯	ユ
1					要	エ
		1			欲	ヨ甲
		1 1			余与	ヨ乙
2	1	3	1		良	ラ
2 3		1 1 1	4		里利理	リ
10 3 1		7 2 1	3 1		流類留	ル
2		3	3		礼	レ
		2	1		呂	ロ
		3			和	ワ
		1			藍	ホ
2	17 1	2	29 2 1 1	17	乎呼為尾男	ヲ

2	2 1	3	5	波揺羽	ハ
1		3 1		婆波羽	バ
		1			
4		2 1 1	5 2	比必日飯	ヒ甲
1		1		砵	ビ甲
		1		備	ビ乙
1			1 1	布負経	フ
	1	2		重部	ヘ甲
		1 1		辨便	ベ甲
1		3	1	倍経	ヘ乙
2	1			倍	ベ乙
1		1 2	1	保穂	ホ
2 1		1	5 2	麻末真	マ
		1			
5	1	1 3 4	1 1	美三見	ミ甲
2	7 1	3 2 2	2	武牟六	ム
	1 2	2	1	米目	メ乙
1	21 5 2 1	1	23 5 3 4	18 6 1	毛聞母方物藁藻哭
	2		2	1	モ
	1		1		